

## 校名：宮崎大学教育学部附属幼稚園

所在地：〒880-0031 宮崎市船塚1丁目1番地 電話番号：0985-24-6707

記載日：平成28年5月20日

記載者：瀬戸山 由香里

記載者役職：園長

### 貴園の校風、おおまかな特色について：

本園は、あたたかい雰囲気の中で、子ども一人一人の発達や個性を大事にした保育を行っています。子ども達は、主に好きな遊びをしながら、遊びの中で「かかわる力」、「考える力」、「表現する力」を身に付けています。

#### ・教育目標

「生き生きと活動できる子どもを育てる」

#### ・保育の重点的方針

- ①子ども一人一人の発達や個性・特性を尊重する。
- ②好きな遊びを中心に、子どもの自発的な活動を重視する。
- ③身近な人とのあたたかいかわり合いを大切にする。
- ④豊かな自然環境の中で育てる。
- ⑤小学校への移行が円滑に行われるように各年齢の生活の充実を図る。



#### ・特色

「コミュニケーションスキル活動」、「運動遊び」、「わらべうた遊び」、「附属小学校との交流活動」  
「附属小学校・中学校、大学との連携」

### 貴園の卒園生の活躍状況について：

- ①追跡調査はしていない。
- ②卒園生の保護者からの情報や、卒園生が幼稚園に来園した際に情報を得ている。

### 貴園勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

- ①追跡調査はしていない。
- ②本人や他の職員等から活躍状況について情報を得ている。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて

## 1【かかわる力】

### (1) コミュニケーションスキル活動（ソーシャルスキル教育）

本園では、平成15年度より、宮崎大学教育学部佐藤正二教授とともに、コミュニケーションスキル活動についての研究、実践を行っている。この活動は、5歳児を対象に、「もくせいの時間」としてスタートした。活動の事前と事後には、「幼児用社会的スキル尺度保育者評定版」（金山ら 2011）と「幼児用問題行動保育者評定尺度」（金山ら 2006）を使用し、指導の効果を査定している。社会的スキルでは、「会話をしかける」「友達をいろいろな活動に誘う」など、他者に働きかけるスキル、「ルールに従う」や「順番を待つ」という規律を守って他児と協調するスキル、「葛藤場面で気持ちをコントロールしたり、適切に対応する」などの自己統制スキルが活動後に大きく向上している。そのために、3歳児、4歳児のクラスでもコミュニケーションスキル活動を行っている。スキルカードを使い、毎時間の活動内容を家庭にも詳しく伝え、約1週間かけて子どもの姿を注意深く観察し、変化を記入してもらい、親子でも学んだスキルをふり返るようにしている。



本園の取組については、図書「実践！ ソーシャルスキル教育 幼稚園・保育園」（図書文化出版 佐藤正二編 平成27年11月発行）にも一つの章として取り上げられている。読者が、すぐに活用できるよう、活動案を示し、HPから、使用する資料（紙芝居など）もダウンロードできるようにした。

### (2) リラックスタイム

平成18年度から健康教育の一つとして、ストレスマネジメント教育を「リラックスタイム」と名付け、子ども達がストレスと対面する場面において、具体的な対処の方法を考えるプログラムと、簡単なリラックス体操を組み合わせたものを、養護教諭が中心となって、年中児を対象に、年に5回行っている。時間は、約20分間で、降園前に行っている。場面としては、「一緒に遊ぼうと言ったのに、返事がない」「使っていた道具を友達に取られた」「お弁当に食べたくないものが入っている」「帰ったら公園に行こうとお母さんと約束したのに、お母さんの用事で行けなくなった」「つくったものが壊されていた」など、普段の生活でありそうな場面を設定し、いろいろな対処法を考えることを中心に行っている。実施後は、園生活の中で、対処の方法を考えている姿を認め、賞賛している。また、「リラックスタイムだより」を発行し、活動の内容を保護者へ伝え、日常生活で実践している姿を認め賞賛してもらうようにしている。



## 2【小学校への円滑な移行】

### (1) 集団活動・交流活動（年長児）

小学校への円滑な移行のために、平成15年度から、5歳児の「集団活動」、「小学校との交流活動」の年間計画を立て、継続的に実施している。「集団活動」は、年21回行っている。好きな遊びを重視しながらも子どもの発達段階や季節などを考慮し、「こいのぼりをつく



ろう」「クリスマスの飾りをつくろう」など興味・関心のある楽しい内容の活動を体験させるようにしている。指導過程の導入の段階では、子どもの意欲を高める必要があり、特に「かかわる力」が育まれるような援助を行い、展開の段階では、「かかわる力」「考える力」「表現する力」の3つの力の育ちを考慮し、まとめの段階では、自分の気持ちや考えを発表させ、「表現する力」を育てるような援助を進めてきた。

小学校との交流活動は、年に6回行っている。1年生との交流活動は、生活の時間を中心に、「1年生と遊ぼう」「秋と遊ぼう」「もうすぐ1年生」「小学校へ行こう」の4回、2年生とは、「わっしょい元気まつり」「大学探検」の2回行っている。

平成18年度からは、5歳児に地域への興味・関心を持たせ、様々な人や施設に触れる機会をつくるために、近隣の保育園の園児との交流活動も年2回行っている。

## (2) 「子育て教室」

宮崎大学教育学部立元真教授の協力のもと、本園職員が、年中児保護者の希望者に、5月から6月にかけて5回、「幼児版子育て教室」を行っている。「注目の与え方 こどもの行動の分類」「ほめる!!」「注目獲得行動へのシランプリ」「ぼーそー行動への上手な制限」「子どもの発達と心の問題 問題解決」などのプログラムである。また、スムーズな小学校への適応を目指して、小学校入学前の2月から3月に、年長児保護者の希望者に、「幼保小連携版子育て教室」を5回行っている。「注目と行動の分類」「ほめる」「家族のルール」「ソーシャルスキルトレーニング」「問題解決的思考法」「学習指導」などのプログラムである。



## 3【研究】

### (1) 「かかわる力を育てる援助の在り方」の研究

平成17年度から、研究主題を「かかわる力を育てる援助の在り方」とし、「運動遊び」や「わらべうた遊び」、「特別支援教育」などの視点から、研究を継続し深めている。他園でも利用できるように、運動遊びにおいては、「わくわくカード」、「がんばりカード」を、わらべうた遊びでは、楽譜と遊び方をまとめた「わらべうた遊び 資料編」や、かかわる力を育てるための「教育課程」の冊子を作成した。

### (2) 附属小学校・中学校、大学との連携

附属学校園では、大学の先生方と共同研究を月1回行っており、年度末には全体会を行い、各教科の研究の成果と課題について共有し、次年度に生かすようにしている。本園職員は、図画工作科、生活科、学校保健の部会に参加しており、その成果を普段の保育にも生かしている。

幼稚園と大学との連携として、「創作ダンス」に取り組んでいる。宮崎大学教育学部高橋るみ子准教授を中心に、保健体育科の学生やNPOの方にダンスの楽しさを教えてもらい、公立のホールで行われるダンスの発表会に参加している。平成26年度からは、美術の先生や学生が、子ども達の衣装やステージで使う小道具等も製作してくれている。



地域において、現在、貴園はどのような存在であると考えますか。

#### ① 研究公開を通じた教育振興

県内の幼児教育の向上、教諭の資質向上のために、県内唯一の研究園として研究に取り組み、年1回の公開研究でその成果を伝える。

#### ② 研修の機会や資料等の提供

県内の幼児教育にかかわる方々や保護者を対象に、県内外から講師を招聘し、本園で講演会やワークショップを行い、研修の機会を提供したり、本園で研究してまとめた資料集等を提供したりしている。また、私立幼稚園の研修会でも、本園職員が講義を行っている。

### 附属学校の存在意義、貴園の存在意義について

#### ① 県内の幼児教育の課題への取組

県内の幼稚園、保育所、認定こども園がそれぞれの園種の壁を越えて連携を図り、未来の子どもたちにとって望ましい幼児教育のあり方について共に学び合い、専門性を高めることを目的に、平成22年度に「みやざき幼児教育連絡協議会」の発足を提案した。本園は事務局として、夏季休業中に教員等研修会を実施している。内容は、喫緊の課題について大学の先生による講話と、年齢別協議会等である。また、2月には、本園の公開研究会の後に、みやざき幼児教育連絡協議会メンバーである県こども政策課の担当主査や国公立幼稚園協会会長、県幼稚園連合会会長、県保育連盟連合会理事長、宮崎市学校法人幼稚園協会会長、県PTA連合会会長、本園PTA会長等と、県の幼児教育の現状と課題について情報交換を行っている。県の幼児教育の向上のために、幼稚園、保育所、認定こども園のパイプ役としての役割を果たしている。

#### ② 若手教諭の育成

毎年6月に、本園を会場に、県幼稚園・保育所・認定こども園等新規採用者研修会を行っている。公開保育を実施し、その後、協議会を行っている。この他、県からの依頼で、本園職員が新規採用者研修会の講師を務めている。

#### ③ 大学への還元

大学の实地指導や教育実習の中で、教育要領における「第1節 幼稚園教育の基本」にある「自発的な活動としての遊び」を進めていくために、教師としてすべき援助について、具体的に学生に指導することができる。そのためにも、遊びと5領域の関係を実践の中で捉え、そのことを学生に伝えていくと、幼児教育に携わった時に、遊びの見方が分かり、保育の質も徐々に高められると考えている。附属だからこそ実現できるのではないかとと思われる。

#### ④ 地域への還元

本園職員が、平成23年度「第41回 九州地区小学校家庭科教育研究大会宮崎大会」において、幼児期のごっこ遊びと家庭科のつながりをまとめた。それは、交流人事で本園に勤務した職員が、公立小学校に戻り、幼児期の遊びが家庭科の内容につながっていることを理解していたからこそ、本園に提案できたことである。

この他、コミュニケーションスキル活動など、幼稚園での実践を、公立小学校でも生かしている。